

令和4年度 新潟市花育推進委員会（第1回）

日 時：令和5年3月28日（火）午前10時00分～

会 場：新潟市役所ふるまち庁舎 403 会議室

司 会	<p>本日の進行を務めさせていただきます、食と花の推進課の佐藤です。どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>開会にあたりまして、食と花の推進課長、吉田よりごあいさつ申し上げます。</p>
食と花の推進課長	<p>おはようございます。課長をしております吉田です。</p> <p>花育の推進計画につきましては、令和4年度、今年度末が一応、最終年度という一つの区切りの段階にきております。次年度からは、本市の総合計画ですとか、農業構想というところにその要素を取り込みながら進めていきたいと考えております。</p> <p>花育につきましては、やはり今後も市民にとって身近な存在であってほしいと思っておりますし、そういう位置づけでいけるように、本市としても進めていければと思っておりますので、本日、どうぞよろしくお願いいたします。</p>
司 会	<p>ありがとうございました。</p> <p>議事に入る前に、3点確認させていただきます。</p> <p>1点目は、本日の会議形態と出席者です。本日は、対面での開催となります。青山委員、片岡委員、坂井委員がご欠席となります。また、会場内の人数を最小限に抑えるために、関係課を参集していないことを申し添えます。</p> <p>2点目は、配付資料の確認です。当日の配付になり、大変申し訳ございませんでした。本日、机上配布の資料は、まず次第、座席表、委員名簿。続いて資料1-1「令和3年度花育推進事業の取り組みについて」、資料1-2「令和3年度花育マスター活動状況まとめ」、資料1-3「令和3年度花育活動実施アンケート集計結果」、資料2「令和4年度花育推進事業の取り組みについて」、資料3「今後の花育推進について」、続いて「新潟市農業構想」です。最後に、「にいがた花育通信 vol.44」ということとなります。資料の不足はございませんでしょうか。大丈夫でしょうか。</p> <p>3点目ですけれども、会議の録音についてです。本会議は公開となっております。後日、ホームページなどで議事録を公開するため会議を録音させていただきますので、ご承知おきください。また、記録、広報用に写真撮影をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。</p>

	<p>本日は、取材と一般傍聴はございません。</p> <p>それでは、ここからは中野会長より議事を進行していただきます。中野会長、よろしくお願いいたします。</p>
中野会長	<p>おはようございます。皆さん、よろしくお願いいたします。</p> <p>それでは、さっそくですけれども、議事を進行させていただきたいと思っております。進行の方法につきましては、議題が1、2、3とあるのですが、まず1、2の説明が終わった時点で、一度、委員の皆様からご質問やご意見をお受けして、それからさらに議題3の説明が終わった時点で、また再びご質問、ご意見等をお伺いしたいと思います。</p> <p>それでは、議題(1)「令和3年度花育推進事業の取り組みについて」及び(2)「令和4年度花育推進事業の取り組みについて」、この2点について事務局から説明をお願いいたします。</p>
事務局	<p>食と花の推進課の加藤です。私から「令和3年度花育推進事業の取り組みについて」説明させていただきます。資料1-1をご覧ください。</p> <p>1 ページ目が数値指標の取組一覧となっております。それぞれの指標に関する取組概要については2 ページ以降に記載しておりますので、併せてご覧ください。</p> <p>1 「情報誌の発行部数」については、平成30年度から予算の関係で部数、発行回数ともに減少しておりますが、令和2年度も年3回、6,000部を発行しました。</p> <p>2番「花育関連講座の受講者数」については、食育・花育センターにおいて各種園芸講座、寄せ植え講座、苔やアロマ等の講座を開催し、受講者は計1,560人で回数は61回でした。4月から6月中旬にかけて新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、園芸講座やイベントでの花育体験の実施を中止したため、受講者数は減少しています。</p> <p>3 「花育の日・花育月間の推進」については、4月は花の小売店に協力いただきまして、花育の日のPR用のぼり旗の掲揚と協力店独自の特典と合わせた花の種の配布を行いました。32社45店舗と多くの店舗から参加いただきました。また、食育・花育センターでは、4月10日、11日の春いくフェスタで体験参加者69名に、花育PRセットを配布いたしました。また10月は、いくとぴあ食花主催の新潟フラワーマルシェと同時開催で、花育体験のワークショップを3ブース開催しました。122人が参加し、花や植物に触れる楽しみを実感してもらう機会となりました。このほかに、3月の取り組みとしまして、春の花育の日、花育月間のPRを兼ねまして、アレンジメント講座を3月13日に旧第四銀行住吉町支店で開催しまして、18名から参加いただいております。そのため、令和3年度は、花育の日、花</p>

育月間の推進というところが年3回という扱いにしております。

4「花育マスターの派遣件数」については、令和元年度より派遣から紹介に制度変更し、花育マスターの活動はアンケート調査により把握しています。昨年度に比べて活動回数と参加者数ともに増加しています。資料1-2は、「令和3年度花育マスター活動状況まとめ」としてアンケート結果をつけておりますので、お時間のあるときにご覧いただければと思います。

5「花育団体体験プログラム」等の実施については、食育・花育センターにおいて市内外の小学校、幼稚園、保育園、こども園等を対象に実施しました。実施校数数は、58回1,560人でした。このうち市内1校がアグリ・スタディ・プログラムを実施しました。

6「保育所、幼稚園、小学校の地域との連携による花育活動実施率」については、毎年市内の公立校等にアンケート調査を実施しております。こちらについては、令和4年度と併せまして後ほどご説明させていただきます。資料1-3にアンケート結果をおつけしておりますので、こちらもお時間のあるときにご覧いただきたいと思います。

7「生産現場の花育活動登録数」については、花育マスターの制度変更により団体としての登録数は0となりましたが、生産農家と学校等が連携している取り組み自体は多いですので、そうした活動にスポットを当て、持続的に取り組んでいただきたいと思います。

8「緑化活動推進事業の実施団体数」です。公園をはじめとした公共施設などで緑化活動を行う地域団体等への支援としまして、花の苗などの購入費を補助し、緑豊かで潤いのあるまちづくりを推進する事業となっております。令和3年度は、335団体が実施し、前年度より増加しています。

9「新潟の花や緑について生産者や流通の現場で学ぶ講座等の受講者数」については、例年、花の産地であります秋葉区において生産現場を巡るバスツアーや栽培講習会をコロナ禍前は実施して好評でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で令和3年度も中止となっております。代わりに7区役所にて鉢花の寄せ植えを展示し、来庁者へPRを行いました。

10「多面的機能支払交付金事業を活用した植栽による景観形成等への取り組み」につきましては、取組率が86.3パーセントということで、前年度より増加しました。

続きまして、5ページの2「その他の取り組み」についてお話しさせていただきます。(1)「花育俳句」につきましては、前年度に引き続き、令和3年度も募集し、全国から811人、1,205句の応募がありました。俳句をとおして花に興味、関心をもつていただくとともに、新潟市が花の大産

地であり、花育に取り組んでいるということを全国にPRする機会になっていると感じています。

(2)「園芸相談の実施」ですが、こちらは、食育・花育センターで実施している専門の相談員による無料相談となっております。令和3年度は5,178件と多くの市民から利用いただきました。

(3)「萬代橋チューリップフェスティバル」です。市の花チューリップを育てて、市のシンボルである萬代橋と周辺を彩る取り組みで、多くの園、学校で取り組まれています。令和3年度は、442の団体及び個人が参加しています。

続きまして、6ページ目の3「関係団体と連携した取り組み」です。(1)「にいがた花推進委員会と連携した『新潟の花を送ろう』キャンペーン」、こちらは例年実施している取り組みですが、令和3年度の新しい取り組みとしましては、「2022 フラワーバレンタイン」を初めてメディアシップで開催し、新たな層への働きかけということで行いました。

7ページの(2)「にいがた花絵プロジェクト実行委員会による花絵制作」です。チューリップを楽しんでもらい、生産者にエールを送るという目的で、冬にチューリップを販売する「Sundayだけのチューリップ花屋さん」という取り組みを万代シティで行ったほか、令和3年度は「花絵制作」をスタッフのみに縮小して行いました。食と花の推進課は、プレスリリース等を行いました。

以上で、令和3年度の花育推進事業の説明を終わります。

続きまして、資料2をご覧ください。こちらは、新潟市花育関連事業の実施状況、第2次新潟市花育推進計画の数値指標一覧としまして、目標策定時の平成26年度から、計画期間終了の令和4年度までの数値を表したものとなっております。令和4年度の取り組みの詳細は、次のページ以降でございます。詳細につきましては、令和4年度の新規の取り組みを中心に説明させていただきます。

まず1番『花育通信』の発行部数ですが、令和4年度は4,000部となっております。今年度につきましては、令和5年3月発行の3回目を予定していたのですが、こちらをG7サミット開催の記事を載せるために、4月発行とさせていただきます。そのため、部数が2回分ということで減少しております。

2「花育関連講座の受講者数」は、食育・花育センターの講座の受講者数となっております。コロナ禍の影響で、令和2年度以降、少し低迷しています。

3「花育の日・花育月間の推進」です。令和3年度から年3回開催して

おります。令和4年度につきまして、2ページ目をご覧ください。資料の2ページ目の「3月の取り組み内容」というところがございます。こちらが新規の取り組みとなります。「スプリングブリーズ in ラブラ万代」としまして、今回ラブラ万代及びイオンスタイルとの共催によりまして、ラブラ2の1階と2階で食と花の魅力体感イベントを開催しました。花に関しましては、市内産チューリップの生産農家に協力いただき販売を行い、また県内産チューリップの装飾展示とワークショップを行いました。こちら、新潟農業・バイオ専門学校の学生から販売とワークショップを実施していただきました。ホワイトデー前ということで、チューリップ販売につきましては、ラッピングをオプションとして用意しまして、アビオの学生たちにデザインを考えていただいて実施する形としまして、大変好評をいただきました。今後もこのような機会を設けていきたいと考えております。

もう一度、指標の一覧にお戻りください。5「アグリ・スタディ・プログラムに基づく花育体験や団体体験プログラムの実施団体数」です。平成27年度以降、ほぼ目標値を上回る件数で推移してきていましたが、令和2年度以降は、新型コロナウイルスの影響により低迷しています。

次に6「保育所、幼稚園、小学校の地域との連携による花育活動実施率」です。こちら平成27年度以降、年々増加しまして、令和元年度に目標を達成しましたが、令和2年度以降は新型コロナウイルスの影響により、地域との協働を控える傾向があり、低迷しています。

次に8「緑化活動推進事業の実施団体数」です。コロナ禍での減少から、令和4年度は344と少しずつ増加してきています。

次に9「新潟の花や緑について生産者や流通の現場で学ぶ講座等の受講者数」です。こちらについては、令和4年度に新規の取り組みを行いました。4ページをご覧ください。(8)です。「花と食の探求ツアー」と題しまして、花育のバスツアーを実施しました。花の生産現場を訪れ、生産者から直接話を聞くことで、生産者の努力を知ってもらうとともに、市内産の花を日常に取り入れてもらうきっかけづくりとして開催いたしました。農家レストランで採れたての野菜を味わうことで地産地消の意識醸成というところも狙って行いました。参加者からは、お花を作っている方の変り加減が分かったとか、これからは市内産の花を意識しますなどの声が寄せられました。

それでは、もう一度指標一覧にお戻りください。10「多面的機能支払交付金事業を活用した植栽による景観形成等への取り組み率」ですが、こちらは、ほぼ横ばいで推移しております。

5 ページ目をご覧ください。5 ページ目の2「その他の取り組み」としまして、(1)に「花育俳句」がございます。今回は、花のある生活を題材として募集しまして、花育推進委員の皆様から選考していただきました。ありがとうございました。また、新潟県花き振興協議会から協賛をいただきまして、優秀句として選出された方には市内産のお花、チューリップ、アザレアを記念品として贈呈させていただきました。応募全句につきまして、市ホームページに掲載しているほか、4月には食育・花育センターのイベント時において掲示することを予定しています。本日、委員の皆様の上に花の種をお配りしておりますが、そちらにも花育俳句の優秀句を貼っております。このほか、3個入りの球根にも優秀句を貼らせていただいたりしまして、活用させていただきたいと思っております。

そのほか、令和4年度の新規事業としまして、6 ページ目をご覧ください。(4)「にいがた2 km食花マルシェ」を挙げております。こちらは、万代シテイの食会場と新潟駅の花会場の2か所で開催しまして、本市の魅力である食と花を市内外に向けて発信し、二日間合わせまして5万589人が来場しました。来場者からは、「普段花を見る機会がなかなかなく、今回マルシェで買ってみようと思った」とか、「花の生産者と直接話せるイベントはほかにはない」などのお声をいただきました。出店者の方からも、「人が集まる場所での出店で新潟が花の有名産地であることを発信できた」などのご意見をいただきました。令和5年度につきましては、「にいがた2 km食花マルシェ」として、10月7日土曜日、8日日曜日の二日間、新潟駅西側連絡通路が工事予定ということで、万代シテイに食と花の会場を集約して開催する予定としております。

続きまして7ページ目です。3「関係団体と連携した取り組み」についてです。(1)「にいがた花絵プロジェクト実行委員会による花絵制作」は、令和4年度が30周年記念となりまして、「ありがとう」をテーマとした巨大壁画を制作されました。こちらの実行委員会は、令和4年度をもちまして活動を休止されるということで、解散ではなく休会ということになっております。

(2)「にいがた花フェスタ『にいがたフラワーバレンタイン2023』」につきましては、食と花の世界フォーラム組織委員会で例年取り組んでいる事業になります。食と花の推進課が事務局を担っているため、今回、令和4年度事業から掲載をさせていただきました。こちらは、バレンタインの時期に合わせて、人通りの多いJR新潟駅での花きの装飾展示と駅ビル内飲食店で特定商品を注文、購入した方に市産のチューリップを530本配布いたしました。

	<p>令和4年度の花育推進事業の取り組みの説明は以上となります。</p>
中野会長	<p>ありがとうございました。それでは、(1)と(2)を併せて二つのご説明をいただきましたけれども、それらの説明につきまして、ご質問、ご意見等がありましたらよろしくお願ひいたします。</p> <p>私からよろしいでしょうか。やはりコロナ前、コロナ途中、それから少しコロナ明けかけという感じですが、数値的な推移というのはご説明いただいて大体分かるのですけれども、この中で特に影響を受けた、あるいは影響を受けていない、その辺りがありましたら、少しご説明いただいてよろしいでしょうか。</p>
事務局	<p>数値指標一覧で見えていきますと、この数字に少し網掛けで色がついている部分が特に新型コロナウイルスの影響が大きい部分ではないかと思っております。2の花育関連講座の受講者数、こちらは食育・花育センターによるものと、5番の花育団体体験プログラムの実施団体数、こちらも食育・花育センターに小学生や園児がバスでいらっしやって体験するところ、それから6番の保育所、幼稚園、小学校の地域との連携による花育活動実施率、9番の新潟の花や緑について生産者や流通の現場で学ぶ講座等の受講者数というところで、こちらがコロナ禍の影響が大きかった部分ではないかと思っております。小学生とか園児の方が団体でバスを利用して移動するとか、そういうところがコロナ禍ではなかなか控える傾向があったと思いますので、これが数字に現れてきているということですので。それから、保育園、幼稚園、小学校における花育活動につきましても、花育活動自体は活動されているのですが、やはりそこに地域の方を呼んでということを抑えるということがアンケートでも聞かれましたので、そういうところ、コロナ禍でのあり方ということを考えなければいけないのかなと、ウイズコロナということもありますので、少しやり方などを考えていく必要があるのかなと思っております。9番のバスツアーにつきましても、やはり市民の方を多く集めて、以前は秋葉区で開催されていたのですが、大人数を集めてのバスツアーとなりますと、コロナ禍では難しい部分がありますので、今回、食と花の推進課でも花の産地を巡るバスツアーというものを開催はしたのですが、コロナ禍でバスの中も定員の半分ということに絞らざるを得ないということで、せっかくのツアーなのですが、定員を上回る応募をいただいたのですが、やはり定員を絞らなければいけなかったというところで、もったいない感じが出てまいりますので、この辺りもあり方について。</p>
中野会長	<p>そのあたりは、来年度以降、例えば定員を半分にするとかという制限をなくすような形で進めていく予定なのですか。</p>

事務局	<p>バスツアーにつきましては、職員により実施はしたのですが、費用対効果というところで少し厳しいのかなという見方もありまして、今、検討をしているところです。</p>
中野会長	<p>阿部先生とか村井さんにお聞きしたいのですが、今、小学校とか少なくなってきたという話を聞きましたけれども、来年度以降、そのあたり、小中学校からの立場で、どのように推移していくような感じなのでしょうか。予想として。</p>
村井委員	<p>小須戸小学校は、中学も花植えとか、毎年、新1年生が矢代田駅前に小須戸中学新1年生全員と矢代田保育園、矢代田小学校と連携して、この予算は多分、花育の予算ではないと思うのですが、秋葉区のコミュニティ協議会の予算、ごみのお金を使ったりして、東口と西口に毎年、花を植えさせてもらっていますし、小須戸小学校も、花育予算ではないけれども、公民館予算を頂戴して、校舎前にプランターを置いて花を植えるとか、そういう活動はやらせてもらっています。中学校は、とにかく毎年5月の第1か第2くらいの日、新年度にやるということで組ませてもらっているので、そういうところは継続してやらせてもらって、ちょうど私は自治会長もやっているんで、私、今この統計を見ていたのだけれども、緑化活動推進実施団体数、これは、全区をとっているのでしょうか。その辺の取り方、秋葉区は建設課予算で花をくれているものだから、多分こちらの予算ではなくて、秋葉区全体で自治会でやりたいところは手を挙げなさいということでやらせてもらっているので、取り方の数は分からないのだけれども、多分秋葉区の建設課のものも入れたら、もっと数字的には上がるのではないかなと思っていますけれども。今のところ、そういう状況です。</p>
中野会長	<p>ありがとうございます。根岸小学校はいかがですか。</p>
阿部委員	<p>秋葉区は花き栽培がとても盛んで、それを押し出している地域ですから、きっとそういう盛んな様子があると思います。学校現場は、コロナ禍で行事や教育活動を本当に見直すということが行われたので、もちろんあっていいな、自分たちの学校だったら花育が絶対いいなと思えば戻ってくるでしょうし、やはり南区は果樹にウエイトをとるとそちらの活動を優先して、精選していく中では花きはその次にしようということもあるかもしれないし、コロナ禍以前と同じようになるかと言われたら、同じではなく、精選され、また増えてくるかもしれないということで、各地域、各学校がどれだけその地域の特色を活かして取り入れていくかということにかかってくると思います。それには、多分、地域の方の働きかけもきっと大きな影響を及ぼすでしょうし、市全体としての、市は花き栽培がとて</p>

	<p>も盛んで素晴らしい環境なのだということをより打ち出していくことで、各学校がそれを取り入れるということは考えられるのではないかなと思います。ウイズコロナで、精選ということが学校の中ではものすごく行われています。</p>
中野会長	<p>分かりました。大変そうでしたけれども、ありがとうございます。 ただいまの流れでもかまいませんし、ほかのこともかまわないのですけれども、ご意見、ご質問等がありましたらよろしく願いいたします。</p>
中野（節） 委員	<p>いいですか。学校の流れで。南区と、あとは小須戸地区なのですけれども、私は、どちらかと言うと小合地区の中学校、小学校に関わらせていただいています、まったくボランティアで、私もボランティアで指導に行きますし、地域の生産者の方たちがボランティアとして子どもたちの花に関する教育というものをやってくださっているのです。草取りをやったり、剪定したりという、本当に地域の園芸屋さんたちが手伝ってくださっているのです。その姿を見ているとやらずにはいれなくて、とりあえず小合小学校の花育は1年生から6年生までの縦割りでやっているのです。1年生を教えるのは高学年が教えるので、その高学年を私が教えるということになっていて、彼等が地域の産業と未来につながるような、自分の地域を自慢できるようないわゆる講座をしないと、可愛いよね、綺麗だよねだけでは彼等は納得しないので、私の地域の中で縦割りの中の教育の一環を少し手伝わさせていただいているというところです。それは、すべてが地域の方たちが子どもたちのために花でどうにかしてあげたいという小合地区のすごい力があって、私が動かされているところはあります。ですので、守っていきたいエリアかなと思いました。</p> <p>それから、バスツアーに関してなのですけれども、以前、秋葉区のバスツアーを立ち上げのときからずっとやらせていただいております、本当に定員オーバーの、3倍くらいまで、もっと、20人定員のところに150人が集まるようなバスツアーだったので、これはどうにかできないのかと言って行政の人と話し合いをしたのですけれども、やはり行政に頼ってしまうのは限りがある、民間のいわゆる旅行社を取り込もうと言ってツアーに見学に来ていただいて、こういうものがあるから小さな旅行社でやってみてくださいと言ってあるところまでいったのですけれども、結局コロナで動けなくなってしまったということがあります。ですので、やはり経験値として、これは絶対にいける企画だよなど、特に今回は食も絡めているので絶対がいいなと思うのですけれども、そこはやはり民間の力がなくて、いずれは滞ってしまう。費用対効果もそうだと思います。これを行政の人がやっているような場合ではないよなどは感じました。ですので、民間が</p>

	<p>頑張らなければいけない。バスツアーに関しては、そのように思いました。</p> <p>この資料の中ですごく気になったのが、7番「生産現場の花育活動登録数」というところで、目標値として20あったのに、結局2でしか推移していきなく、ここ3年くらいは0になってしまっているというのは、これは何か理由があるのかなと、生産現場の人たちのそばにいる私としては、すごく残念な結果だなと思ってしまった次第でございます。ですので、私たちが思う花育、地域で子どもたちとか、環境をよくしていこうという思いと、生産現場の生産者たちとの意識のギャップがそこにあるからつながらないのかなと、この数字で見て少し愕然とした次第でございます。花のまちにいがたなのだったら、ここが、民間も行政も現場も、すべてのところで意識づけができなかったらこれはアウトかなと思って、生産現場に近い人間としてすごく反省させられた数字で、ごめんなさいというところです。</p> <p>もう一ついいですか。10番目の「多面的機能支払交付金事業」というものが私は理解できなくて、「農村整備・水産振興課による」と書いてあるのですけれども、これは花にかかわることなののでしょうか。実は、胎内市の花育のお手伝いをさせていただいて、胎内市は、休耕田とか少し荒地のところを花できれいにするとあって、パンフレットを見るとすごく分かりやすいのです。ここは花を植える。それ以外のものはだめですという大きなエリアがあって、そこに花の選び方であるとか、植え方であるとか、そして障がい者施設も含めて障がい者を連れていって一緒に花を植えましょうみたいなことも胎内市ではさせてもらっているのですけれども、ここが少しぼやけて、花や緑に親しむ場の整備という、これは結果としてどこがどうなったのかが分からないのですけれども。</p>
中野会長	そのあたりをご説明いただけますか。
事務局	4ページ目に写真がございまして、(9)番の多面的機能支払交付金事業を活用した植栽による景観形成等への取り組みのところですのでけれども。
中野（節） 委員	これですね。
事務局	はい。このように、農村環境のところに花を植えて田園の多面的な機能を維持していきましょうということで、こういう交付金がございまして、それを活用して、地域の方が農村の道路のところですかに花植えをして、地域で花植えをするというところに補助が出るような事業になっておりまして、それによって農村環境、景観がよくなるというような、こういう事業がございまして、それを活用している団体がいくつあるかというところを指標としております。
中野（節）	分かりました。ありがとうございます。

委員	<p>いろいろなところからいろいろなお金の出方がありますからね。ありがとうございました。</p>
中野会長	<p>ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。よろしいでしょうか。では、先に進ませていただきたいと思います。</p> <p>続きまして、(3)の「今後の花育推進について」、こちらに関しまして、また事務局から説明をお願いいたします。</p>
事務局	<p>資料3をご覧ください。今後の花育推進について、説明をさせていただきます。</p> <p>まず、令和4年度市政世論調査を行いました。「新潟市の花や花育について」という項目を設けて市民の声をお聞きしましたので、そこから結果をいくつかご紹介いたします。</p> <p>まず、新潟市が花の生産が盛んであることを知っていましたかと、花の生産についての認知度を聞きました。「知っていた」が37.5パーセント、「なんとなく知っていた」が38.1パーセント、「知らなかった」が23.8パーセントでした。「知っていた」と「なんとなく知っていた」を合わせますと75.6パーセントとなりまして、市民の花の産地としての認知度は高いという結果になりました。</p> <p>続きまして、いくとぴあ食花のガーデンや食育・花育センターに行ったことがあるかという間で、「よく行く」と「行ったことがある」と答えた割合を合わせますと64.4パーセントとなりました。拠点施設での花育推進の取り組みが一定の効果を上げているということが窺えます。</p> <p>次に、花や植物に触れることで期待できる効果としまして、「季節を感じる」の割合が高く8割を超え、次いで「リラックス効果」、「ストレス軽減」、「元気になる」の順に続きました。花や緑がもたらすリラックス効果やストレス軽減などの効果につきましても市民に知っていただき、実際に体感していただくことが花育としても大切ではないかと思っております。</p> <p>次に、新潟市らしい花育としまして市やいくとぴあ食花に期待する取り組みを聞きました。一番多かったのが「まちを花や緑で彩る」でして、こちらの割合が約5割となりました。次いで「花を観賞できる場の整備」が約4割でした。</p> <p>令和4年度市政世論調査は、花や花育についてほかにも少し項目がございます。こちらにつきましては、市ホームページから結果をご覧ください。</p> <p>次のスライドですが、令和3年度市政世論調査で、新潟市の花や花木に誇りや「愛着がある」、「ある程度ある」と回答した割合を合わせますと、57.9パーセントと約6割でした。これにより、多くの市民が誇りや愛着を</p>

抱いているということが窺えます。

次に、「新潟市花育推進計画」についてお話しします。新潟市におきまして、豊かな自然・田園や花の生産地と都市が近接していることを大きな特徴、利点として捉えまして、花の大産地であることを活かし、花や緑を育み、楽しみながら心身の健康づくり、花のある暮らしづくり、大好きなふるさとづくりをするということで、一層心豊かなまちとなり、名実ともに食と花の政令市にいがたをつくりあげるとの認識のもとに、平成 20 年 10 月に新潟市花育推進計画を策定しました。その後、花育の拠点施設としまして、平成 23 年 10 月に「食育・花育センター」がオープン、平成 26 年 6 月に「食と花の交流センター」がオープンしまして「いくとびあ食花」グランドオープンを迎え、拠点施設の活用ですとか、新潟市花育の日、花育月間を新たに設けまして、花育をより一層推進していくために、平成 27 年 4 月に「第 2 次花育推進計画」を策定しまして、今年度で 8 年間の計画期間が終了となります。

花育推進計画を策定して推進してきました新潟市の花育活動の主な三つを挙げております。専門家としての花育マスターの花育活動、それから花育の拠点施設であります食育・花育センターの花育事業、保育園、幼稚園から小中特別支援学校など園、学校での花育活動です。これらはそれぞれ重なり合う部分もありまして、連携を含めて大きくなっていくことが理想と考えております。

次が、保育園、幼稚園、小学校のアンケート結果です。市立の保育園、幼稚園、小学校での花育活動につきましては、毎年アンケート調査を実施しております。グラフの左側は、地域と連携した花育活動の実施率の経年変化です。黄色が全体となります。平成 27 年度の第 2 次花育推進計画策定以降、年々増加しまして、令和元年度に目標の 60 パーセントを達成しましたが、令和 2 年度以降はコロナ禍の影響で低迷しています。個別に見ますと、保育園、幼稚園においては、令和 3 年度は前年より回復しています。一方、右のグラフですが、こちらは花育活動そのものの実施率となっております。こちらは全体として高く推移してまして、令和 3 年度は、特にコロナ禍の影響からの回復が見られます。

そのほか、アンケート結果から分かったことですが、花育活動の課題として「ノウハウがない」と回答したのは保育園、幼稚園で多いということですとか、「花育マスターを活用したい」という回答も保育園、幼稚園で多くなっていました。また、萬代橋チューリップフェスティバルへの参加が約 6 割と多いということも分かりました。園や学校での花育活動につきましては、チューリップフェスティバルに代表されるように単発の取り組み

が多いところですが、先ほど中野さんもおっしゃったように、花の産地としてSDGsを意識させて子どもの心を動かしたり、一年中、花や緑のある暮らしを楽しめたりするようにしたりすることで、より充実した花育になると考えております。そこで令和5年度は、園や学校での花育活動にそのようなノウハウを提供するという事業を予定しております。具体的には、花育マスターの方を各区のいくつかの園や学校に派遣しまして、秋に植えて冬から春まで花を楽しめるような寄せ植えを実施し、ノウハウを提供することで、次年度以降は園や学校が自走できるような内容で実施したいと考えております。

続きまして、食育・花育センターの花育事業です。こちらは、「団体体験プログラムの実施団体数」と「花育関連講座の受講者数」ともに、コロナ禍の影響で令和2年度以降は低迷しました。今後ですが、ウイズコロナですとか、時代や社会の変化による市民ニーズの変容に対応した花育の取り組みが必要になっていると考えております。そこで、これまで主にいくとびあ食花で交流イベントという8大イベントが年間ございまして、そちらで開催していました「花育のミニ体験」につきまして、回数を増やして花育活動のすそ野を広げたいと考えました。今年度、令和5年度から令和9年度までの5年間のいくとびあ食花の指定管理者の募集を行ったのですが、そちらの指定管理業務委託仕様書におきまして、食育・花育センターのアトリウム等を活用して休日に子どもや親子等が気軽に体験できる花育体験を交流イベントに限らず開催するということとしまして、評価指標として年間48回以上といたしました。これを受けまして、指定管理者において令和5年度事業計画に年間48回以上の花育体験等を開催するとしまして、現在取り組んでいるところです。こちらには、スタッフによるもの以外にも、花育マスターとの連携やセルフ体験などを取り入れて実施しています。配布資料としてお配りした中の一番後ろにチラシをつけております。こちらは食育・花育センターが作成したチラシで、4月の花育体験についてのものです。「毎週日曜日は花育体験に行こう」ということで、このように花育体験の回数を増やして、また内容も充実させることにより、花育のすそ野の広まりを目指した新たな取り組みとなっております。

次です。新潟市の花育で目指す姿というところです。昨年度の花育推進委員会の第1回で話し合われました新潟市の花育で目指す姿ですが、右側のイメージ図のように、さまざまな主体が自信をもって活動しながら、隣と手をつなぐことにより点と点がつながって広がり、大きくなること新潟市らしい花育ではないかとの認識を共有させていただきました。

次の14のスライドになりますが、今後の花育推進についてです。昨年

度第2回の花育推進委員会で話し合われた内容ですが、市の花き産出額や花き生産者の大幅減少などを課題と捉えまして、市の強みである花を市民が知り、楽しみ、交流することをとおしてふるさとへの誇りや愛着が形成されるとともに、花き産業が持続可能な強い産業になるとしまして、花育の推進につきましては、文化、教育面だけではなく、経済面との両輪で推進していくことが必要という認識を共有いたしました。

次に、花育推進の位置づけです。これらを踏まえまして、令和4年度で第2次花育推進計画の期間であります8年間を終えるにあたりまして、令和5年度からの次期総合計画や次期農業構想の策定の機会となりまして、花育推進を新潟市農業構想に集約させるということで、産業面の振興と合わせて花育を推進することといたしました。これにより、花育推進計画の趣旨や目的を農業構想に引き継いでいくことにいたしました。令和3年度花育推進委員会で話し合われたとおり、本市の花育については、今後、文化や教育面に加えて、花の産地として産業面の発展との両輪で推進していきたいと考えております。

それでは、新潟市農業構想についてです。第3期となります新潟市農業構想では、将来像に「食と花の都—都市と田園の調和を活かした持続可能な農業の実現」を掲げています。この基本方針2の「農業を活かしたまちづくり」の(2)「食と農への理解促進とシビックプライドの醸成」の施策18に「食育・花育の推進」が位置づけられています。お配りしました農業構想の冊子、こちらは4月に出る予定のものになりますが、こちらの53ページに花育の部分がございまして、「花の産地としての花育の推進」としまして、花の産地であることの強みを活かし、日常生活の中で花や緑を育むことを通じて、心身の健康づくりや花のある暮らしづくり、地域コミュニティを形成するとともに、需要の拡大につなげ、本市の花き産業の発展を目指しますとしています。

具体としまして、その下に4つ挙げています。一つ目は、まちづくりや公共施設に花や緑を活用し、「花のまち」の魅力を内外に発信します。二つ目は、将来を担う児童や生徒をはじめ幅広い世代に向けて、地域や学校での身近な花育活動を推進し、日常生活における花の活用を図ります。三つ目は、食育・花育センターを拠点に、新潟の花の展示や紹介、季節に応じた講座やイベントを開催します。四つ目が、4月19日、10月19日を「新潟市花育の日」、4月、10月を「花育月間」として、花育の普及啓発に取り組みますとしています。

これらのうち、令和5年度の花育推進事業の取り組みとしましては、資料のピンクの字の部分になりますが、1点目のまちづくりや公共施設への

花や緑の活用につきましては、G7サミットでの花のまちのPRというところになります。配布した資料の中に「にいがた花育通信」というものがあります。こちらで紹介しておりますので、ご覧いただければと思います。5月11日から13日に開催されますG7新潟財務大臣・中央銀行総裁会議で新潟市に訪れます7か国の閣僚や国内外のメディア関係者など多くの方を、食と花の政令市にいがたとして花でお出迎えをするものです。こちらにつきましては、庁内の2023年G7サミット推進課との連携によりプロジェクトチームを立ち上げまして、デザイン担当として花育マスターの方にも活躍していただいています。具体的には、新潟駅南口と新潟空港の2か所で行うものとなっております、駅南口広場は「G7ステーションガーデン」としまして、こちらの植栽の一部には市民ボランティアの募集を行いまして、4月29日に植え込みを行う予定としております。また、こちらのガーデンにつきましては、サミット終了後も一過性で終わらないように、一部を市民の皆さんと育ていくコミュニティガーデンとなるように目指しております。G7については、以上です。

次に、地域や学校での身近な花育活動の推進です。こちらにつきましては、先ほども説明しましたが、園、学校での花育活動へのノウハウの提供です。いくつかの園、学校に花育マスターを派遣して、秋の寄せ植えなどを行い、一年中、花や緑を楽しめるようにする活動を検討しております。

次に、食育・花育センターの取り組みとしましては、花育体験の回数の増加です。こちら先ほどお話ししましたとおり、土日などに来場者が気軽に体験できるワークショップなどの体験の機会を増やすことで、花育のすそ野を広げたいと考えています。花育マスターの方からも連携いただくほか、専門学校の学生との連携も予定しています。このほかにも食育・花育センターにおいては、市内産の花の展示や紹介、園芸講座等への市民ニーズの反映などにも取り組んでおります。

最後の「花育の日」、「花育月間」の花育の普及啓発につきましては、食育・花育センターとの連携を強化しまして、こちらについても継続して取り組んでまいります。

花育推進の歯車というところです。新潟市の花育の推進には、先ほどご紹介しましたイメージ図のように、個々の活動に加えましてさまざまな主体が連携して取り組むことで大きな効果が生まれると考えております。食育・花育センターには、花育の拠点施設として指定管理者の創意工夫により自由に展開していただき、花育をより推進していきたいと考えておりますし、食育・花育センターと花育マスターと市で歯車を回して花育を推進していきますが、これに限らず花き生産、流通、販売、文化、教育、福祉、

	<p>県、民間企業など、さまざまな関係の皆様と連携して花育を推進していくことで、より大きな活動になると思っております。花育推進委員会は、令和4年度末をもって終了となりますが、今後も花育推進委員の皆様とは花育をとおしてつながり、さまざまな場面での連携やご指導やご助言をいただきたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>以上で、今後の花育推進についての説明を終わります。</p>
中野会長	<p>ありがとうございました。それでは、ただいまのご説明に関しまして、ご質問、ご意見等がありましたら、よろしくお願いいたします。</p>
北澤委員	<p>日曜日に食育・花育センターで行われる花育体験の講座に私たちの学生もご協力させていただきたいと思っておりました。いただいた資料1-2の花育マスター活動状況のところの3の活動内容のところ、回数で言うと生け花・アレンジメントが多くて、内容的にはこれが人気があるからこれをやっているのか、それとも花育マスターの方たちが得意な分野だからやられているのかということが知りたいと思っ、できれば協力するときに体験内容を参加される方のことを考えて決めていきたいと思しますので、その内容がどのように決まっていくのかというのを教えていただきたいと思ひます。</p>
事務局	<p>こちら、花育マスターの活動状況というのは、イベントなどでやるものと、あとは花育マスターが独自で自主開催しているものも含まれているので、どうしてもアレンジメントと生け花の生花を使った自主開催、自分の自宅でやっている教室とかの分も入ってしまうので、このアレンジメントの自主開催、先生たちがそれぞれやっているという回数が入ってしまうので、どうしてもここが大きくなるはなってしまうのです。逆に、食育・花育センターなどで行う花育体験で生花のアレンジメントをやると、今一つ人気がないのです。こちらとしては、生花を使ったものをお願いしたいというのはあるのですけれども、どうしても子どもたちがメインになってしまうので、どちらかと言うとお遊びというか、どうしてもそういうものの人気が出てしまうので、生花とか生け花となると講座という形をもって、ある程度の金額をいただいて行うというようにはなってしまうので、今回、この活動状況まとめの部分は、人気があるとかないとかというわけではないです。北澤先生には、今後もいろいろ一緒にご相談にのっていただきながら、内容等もセンタースタッフも含めて一緒にやっていきたいと思ひますので、よろしくお願いいたします。</p>
北澤委員	<p>花育のこの体験で、できれば参加する小さな子たちが、例えばお花博士とか、植物博士とか、将来、花の道の専門になっていきたいとなるような</p>

	<p>体験になっていけたらと思うので、これがプロの方とか、プロを目指すという方を育てるといふ場になれたらと思ひまして、このすそ野を広げるといふ目的と、さらに育てるといふもう一つの何か目標といふものがあるといふなと思ひて、もしそのように設定してもよければ、設定してもよろしいでしょうか。</p>
事務局	<p>大丈夫です。団体プログラムといふものが食育・花育センターでもあつて、それは、平日に学校単位でバスに乗つて来てといふ子たちには、そのいふ植物博士検定とか、そのいふものがあるのですけれども、逆に一般の休みの日に来た子たちに対してといふと、確かにそのいふものはないですね。本当に何かものづくりといふところに特化してしまつていふところがあるので、今、先生のお話を聞かせていただいて、そのいふことで、連続でセンターに通つてもらふとか、そのいふこともいふなと今思ひましたので、ぜひ。</p>
北澤委員	<p>お花がどんどん上手になつてもらふとか。</p>
事務局	<p>そうですね。センターを使つて何度も足を運んでもらふといふ形にももつていけるといふので、ぜひご相談ください。</p>
北澤委員	<p>ありがとうございます。</p>
中野会長	<p>ありがとうございました。ほかにかがでしようか。</p>
阿部委員	<p>さまざまな活動を行ふといふのは本当に大切なことで、その体験を専門家の方やその産業にかかわつていふ方たちが一緒になつてやるといふのはとても大切なことだと思ひます。私、一つ足りないといふか、すごく大事なものがシビックプライドだと思ひます。アンケートの新潟市が花の生産が盛んであることを知つていふか、「知つていふ」が37.9パーセント。これは決して高いといふ言えなくて、「なんとなく知つていふ」よりも「知つていふ」と言つたほうが、知つていふからこの活動に行こうよとなるのではないかなと思ひます。そのいふときに、学校で教えてくれといふても、学校はどんどん入つてくると全部が全部受けきれないところもあるので、簡単にできるといふか、一つ思ふのは、とにかく目にするところに「新潟チューリップ日本一」、「切り花日本一」みたいなものが、このチラシにも入つていふ、この通信にも入つていふ、いろいろな体験のそのいふ案内などでも「日本一」みたいなものがロゴとして入つていふと、市民にPRできるといふか、それがどのくらい定着するかは別の話なのだけれども、でも目にする機会をできるだけ増やせば、日本一だからこれをやつていふのねとか、新潟市は花の生産をこんなにたくさんやつていふことが何となくどこか可愛らしく入つていふと、生産者の方もきっと励みになるだらうし、そのいふのだとか。3月のチラシにはアザレアとか入つて</p>

	<p>いるけれども、4月のチラシにはチューリップの切り花とか、そのようにやってもいいし、とにかく何か新潟市は花の生産が盛んということを常に目にする、こういう計画のところにも入れてしまうみたいな、そういうことも手軽にできるPR方法ではないかなと、お話を聞いていて思いました。もちろん花というのは、精神的な効果もすごく高いけれども、でも新潟市としての根本は、花き産業を盛んに、生産者を支えたいというところが一番だと思うから、そういうところも必要なのかなと思いました。</p> <p>学校へのPRも、例えば花育通信を配ってくださいというチラシや校長会とかに、生産日本一を先生方に、その部分は必ず子どもたちにもお話してくださいみたいな鏡文を付けると、学校としては、配ってくださいただけと配って終わってしまうときもあるので、ここだけは強調してください。全部というとなかなか難しいけれども、文言一つだったら、先生方一言お願いしますと言うと、新潟はね、チューリップをたくさん作っているのだよ、花をたくさん作っている新潟市の花育通信、お家の人と見てねくらいは各教室で言えると思うのです。そういう小さな積み重ねというのが、この計画している体験活動を盛んにしていく一助になるのではないかとこのことを、今考えました。うまくいくかどうか分からないのですけれども、PRも必要かなと。シビックプライドということを感じました。</p>
中野会長	<p>貴重なご意見だと思いますが、そのあたり、実際にどのくらい実現可能なのですか。</p>
事務局	<p>そうですね。私どもで食育・花育推進キャラクターの「まいかちゃん」というものがありまして、いろいろなところで活用させていただいているのですが、そういうところに少しロゴを付けていろいろなところに登場させることは、可能だと思いますので、ぜひ取り組んでいきたいと思っています。</p>
中野会長	<p>「まいかちゃん」に吹き出しを付けて、新潟はこうですよなどというものを書いてやると。</p>
事務局	<p>そうですね。</p>
中野（節）委員	<p>ゆるキャラか何かでありますよね。コンテストとか。</p>
事務局	<p>ありますね。</p>
阿部委員	<p>「まいかちゃん」は、子どもは知っているのですよ。でも、なぜ「まいかちゃん」が新潟にいるかは分からない。そこをお知らせしてあげると、新潟は花が盛んなのだと思えるから、それだと思います。今やっていることもとても素晴らしくて、もちろん子どもたちも楽しく活動に参加している子がいてということもあるけれども、プラスそこにシビックプライドと</p>

	<p>いうものが、必ず目に見えるというのがいいのかなと思います。</p>
中野会長	<p>ありがとうございました。</p>
中野（節） 委員	<p>あと、アンケートで37パーセント、40パーセントくらいの方が新潟は花のまちだと知っているというデータは出たのですが、現場で聞くとこれほどないです。30人くらいの講座をやって、新潟は花の産地だと知っていますかという、0のときもあります。それが現実だなと思っていて、本当に先生がおっしゃるように、一つ一つ、これにあぐらをかいてはいけないなと思って、知らない人のほうが多いです。子どもはまず知らない、先生たちも知らない。知らないですよ。</p>
阿部委員	<p>知らない人のほうが多いと思います。</p>
中野（節） 委員	<p>多いですよ。ですので、父兄も知らない、おじいちゃん、おばあちゃんも知らない、核家族になってそのまた上の世代の人との交流もなくなってしまっているので、まったく知らない人たちに教える、分かってもらう、産地だと分かってもらう活動はとても必要だと思います。</p> <p>私は話を聞きながら、食育と花育は何とつながるのかなと思ったら、環境とか産業とか、農業、子ども、きれいなまち、未来とつながるのだなと書いていたたのですが、そこに例えば環境と花とか、きれいなまちと花とか、農業と花と、何かと花というのをセットにしていくというのが、もしかしたら新潟らしいのかなと思います。</p> <p>私は今、福祉と花ということをやりに始めて半年経つのですが、新潟の新潟らしい福祉の産業というのは必ず花とくっついているのだよということを確認して、今PRし始めているのですが、なかなかうまくいっていません。ですので、それぞれの学校の先生方とか地域の方とか、何かと花、何かと花という意識をもっていきながら活動していただくと、もっと広がってくるのではないかと。先ほどの、いいですよ。「日本一の花の産地」、それ、いただきだと思います。だから、そのときにも、G7のときにもやっしまえばいいのではないですか。のぼりか何かを立てて、日本一の花の産地の新潟市みたいなものを作って。私、「みんなでつくろうガーデン」があったのではないですか。これはいいなと思うのですが、どうやって持ち込んだらいいのか、誰が行ったらいいのか、これだけだと分からない面があるので。</p>
事務局	<p>3月19日の市報にいがたにボランティア募集が掲載されて、ちょうど3月19日号がお花の特集号だったのです。</p>
中野（節） 委員	<p>全然知りませんでした。結局そういうことなのですよ。発信はされていても、耳に入ってこない、目に入らないとなると、伝わってこないということなのですよ。分かりました。がんがん発信したいと思います。</p>

	<p>いいことですね。こうやって花でお出迎えして、それをずっと守っていく。「コミュニティガーデン」は名前だと思って、ずっとそれを、そのガーデンを、例えば小学校の人たちが守るとか、私の障がい施設のメンバーが守るとか、そこでつながっていくのはすごく新潟らしいなと感じました。協力します。</p>
事務局	<p>ありがとうございます。</p>
中野会長	<p>今、同じ、少し違いますけれども、言いづらいのですけれども、アピールが下手な感じがどうしてもするのですよね。行政はどこでもそうなのですけれども、G7でこういう花火を打ち上げるときに、例えば市とか県だけではなくて、例えば全国レベルのメディアなどにも必ずアピールするような形にしないと、少しもったいないですよね。特にG7のときなどは、全国レベルのメディアが来るでしょうから。先ほどおっしゃったように、そのときに日本一のチューリップの産地というのぼり旗が映るといいですよ。</p>
中野（節）委員	<p>あとは、地域住民がどのくらい盛り上がっているか。佐渡の金山を認定するときに、お忍び調査が入ったらいいのです。お忍び調査の人が、どのくらい住民の人たちが盛り上がっているかということ調べるらしいのです。でも案外、佐渡自体が盛り上がってなくて、一部しか盛り上がってなくて、それはアウトなのですね。ですので、今回も、G7に向けて空港と駅周辺をきれいにする、花で飾ろうということ、地域の人たち、新潟市の人たちがこぞって参加しているという、そのようになったらすごく、学生とかも。</p>
中野会長	<p>だから、もう準備段階とかもどんどん取材をさせたほうがいいと思うのですよね。</p>
中野（節）委員	<p>これは、新潟日報の東京支社の方が、新潟に来てもらって取材してもらって、早い時期に。</p>
中野会長	<p>ほかにはいかがでしょうか。いいアイデアがいくつか出ましたけれども。</p>
村井委員	<p>地道な努力だと思うのですよね。わっと言うのも簡単なのだけれども、やはり花に限らず食もそうだし、確かにいろいろなことをしてPRすることもすごく大事なことだと思うのだけれども、やはり底辺が広がっていかないと絶対、上にいかないから、本当に仕掛け方をよく考えると、今言ったように、小須戸は日本一のボケということは必ず小学校で皆が習うから、ボケは日本一なのだという意識があるわけです。そのような地道な努力の結果そのように言われるようになってきているから、新潟も日本一の花の産地だということであれば、今言ったように、それを何にも常に書いてあって、日本一のチューリップと書くような感じで、常に何のときにも</p>

	<p>それが目に入るようにPRしていくことがすごく大事なことだなお話を聞きながら思っているの、そういう地域PRをどういうキャッチコピーでやって常に目に入るかというところを、先ほど広報に載っていると言っても、それは見落とすと分からなくなってしまうから、いろいろなメディアで何でもそういうものを載せられるような感じで、SNS発信するところも新潟市のホームページを見ると「花の産地新潟」が出るようにするというのも方法論かなと感じているので、あらゆるところでそれを常に情報発信するのが大事なかなとお聞きしたので、当然、阿部先生の教育現場でも、子どもたちに新潟は花の産地ですよということも言えるような状況があれば、そうしていくのもいいかなと思いますけれども。</p>
中野会長	<p>ありがとうございます。いかがでしょうか。</p>
中野（節）委員	<p>ここ10年くらい、幼稚園、小学校に毎年お花を持って行って花育活動をやっているのですが、段々、私の孫みたいな子たちに教えることになって少し辛い面もあるのですが、段々と新潟の花が分からなくなっている。例えばアザレア、アザレアはずっと昔からあるのです。最初ころは、アザレア、分かる、見たことがある、見たことがある、名前が出てこないみたいな子どもたちだったのが、途中から見たことない、おばあちゃんの家にあったかなくらいになったのです。最近は、全然知らない、その花はどこにあるの、綺麗だけれど知らないという現状が、これが実際です。私、ずっと同じ地域で同じ活動を続けていて10年間で、どうにかしなければいけないなと思いました。見たこともないという。</p>
中野会長	<p>それは、なぜでしょうか。</p>
中野（節）委員	<p>周りにはないのだと思います。実は生産者も、売れるお花は全部、新潟ではなくて東京に出荷してしまうので、ないのですよ。私は、自分が欲しい分をずっと買い占めて、私が使うところは使うのですが、それ以外は全部東京に行ってしまうので。ただ、東京の方が、新潟のアザレアという名前が出てると、すごく郷土を思い出すらしいのです。ですので、それはそれでいいことかなと思いますけれども、地域の、いわゆる地産地消と食にはあるではないですか。花に関しては地産地消ができていないのかなと思うと、なるべく新潟の花を使いたいなと思っていたのですが、先ほどみたいな話をして、私がこのチューリップはおしゃれだ、アレンジで使いたいと思って買った花が全部富山。私がいいなと思って選んで、いいな、形もいいな、これだったら素敵なアレンジができるなと思って買って、見ると、あれ、これも富山、富山、富山、それが現実です。ですので、買いたいと思わせてくれないという、ごめんなさい。それが現実です。うちは球根屋なので、球根の卸販売をやっていますけれども、やは</p>

	<p>りそこもただ単に毎年同じ赤白黄色、同じチューリップを卸している。それだけでは、やはり富山に負けてしまうのかなと思いました。私たちに責任があるなど。</p>
村井委員	<p>中野さん、それは、生産者がそういう花を作っていないということですか。</p>
中野（節）委員	<p>そうなのですね。出荷してきたものが、富山のチューリップという。</p>
玉木委員	<p>そうですね。富山で今いろいろなものが出ているけれども、私の市場には入ってこないですから、仲卸が、直接東京の市場が取っていると思います。</p>
中野（節）委員	<p>そうですね。ただ花は高いです。高いけれど、おしゃれなので買いたい。</p>
玉木委員	<p>今、市場の話が出たのでよろしいですか。中央卸売市場では花の部門で卸をやっているのですけれども、もっと一般の人を入れてもいいのかなという気がします。場所は、午前中に競りをしてしまえばがらんだので、何をしても、いろいろと準備があるのでなかなか入っては来れないと思いますけれども、そこでもう少しイベント等や、中央棟に食堂があったりしますけれども、私はあまり食べには行っていないのでよく分からないのですけれども、そこでのPRとか、いろいろなことがもっとできるのではないかなということで、職員の人たちと、二人だけになるといろいろと話をするのですけれども、なかなか進展しないので、あそこでPRを、食もあるし花もあるし、一般の人も入って来て物を買っていますので、その辺、魚もあるしということで、使ってもいいのではないかなと思っています。</p> <p>それからもう一つ、この前、全国の市場の社長たちと話をしたときに、花育のことにに関して少し話していた社長がいて、京都生花の社長で、その人はどのようなアピールの仕方をしているのか分からないのですけれども、学生、中学、高校生と言ったのでしょうか、その人たちに来年から生け花をする授業ができるようにしたということで、今度、一度京都生花の社長にどのようにしていったらそのようなことができるのかというのを聞いてこようかなと思っていますけれども、ここでは、京都の学生たちが、年に1回なのかどうか分からないのですけれども、生け花をするチャンスができたということだけ情報として伝えさせていただきます。</p>
阿部委員	<p>今、学校の生け花コンクールというか、競技会がテレビで取り上げられて、けっこうあれですね。</p>
玉木委員	<p>そうですね。では、それもお話しさせていただいて。花生けバトルのことで、全国でやっていて、四国の高松でしょうか、あそこで決勝戦が行わ</p>

	<p>れたのですけれども、去年から新潟で上信越大会というものをやるとなつて、有志というか、お花屋さんを主体にできる人たちが集まってきて、東京から人が来てアナウンスしたりとか、やはり慣れているので上手、私たちはそれをサポートして、初めてやったのですけれども、やはりどうしても高校から生徒を集めようとする、日程的にここはテストだし、ここは夏休みだしということがあって、すごく難しいのがよく分かりました。そして花をPRするとき、高校の先生に、このようなものがあるので参加する生徒はいらっしゃいませんかということ誰にどのように言ったらいいか分からないということで、行き当たりばったりで、高校で生け花をしているサークルに教えに行く生け花の先生にお花屋がこのようなものがあるのですけれども生徒は出ませんかと言うと、やはりそこでは拒否反応が多いらしいです。5分でガサガサとして持って、東でどんと舞台上がって行って生けるといのは、それは生け花ではないのではないかなというように、そういういろいろな意見があるので。去年、1回、県民会館でやらせていただいて、皆さんは感動されたということなので、また今年も個別に担当が行って出ませんかということで、今やっている最中です。もしよろしければ、ぜひ。</p>
阿部委員	<p>テレビで見て、すごい、面白いと思って、そこで私が見たのも全国大会だったか四国の大会だったかだったのですけれども、「持った、地元の何々の花を持って生けている」みたいなアナウンサーの実況があって、そういうのは、地元の花というのがすごくアピールできるなと思ったので、今、ふと生け花とおっしゃったときに、そういうものもあるのだなとすごく思いました。</p>
中野会長	<p>あと、市場はいいと思いますよ。</p>
中野（節）委員	<p>市場は行きたいと皆言いますよね。</p>
北澤委員	<p>ワクワクしますよね。</p>
中野（節）委員	<p>外国人を連れて行くのです。日本人の一般の人を連れて行くと仲卸に怒られそうなので、外国人だったら怒られないかなと。それでヨーロッパ辺りの金髪の女性とかを連れて行って、オービューティフルとか、見ていてすごくワクワクすると言っていましたね。</p>
中野会長	<p>海外に行くと、けっこうその土地の市場とかに私たちも行きたくなるではないですか。それに該当するものが日本にあまりないので。</p>

中野（節） 委員	<p>観光スポットになっているのですね。</p> <p>残念ながら、新潟の人は花を買わないですよ。買わないのですよ。買わない。ですので、それだったら、県外の人たちに来てもらって、良さを知ってもらって、それを買ってもらうほうがいいと思います。アザレアなどは、本当にどんどん県外に出すしかないのかなと思って、県外の人認めて、海外が認めて、はじめて新潟の人はいいのだ、やはり買おうかみたいなことになるので、それが新潟県人のいわゆる消費行動になるとすると、新潟の人に買って、買ってと、それも安く叩いて、通常東京だったら1,000円で売れるものを500円で売るしかないみたいなものであれば、逆に観光誘致して、新潟は花のまちなのですよと行って、それを見せられるような新潟にしていくほうが簡単かなと思ってしまいますけれど。特に小須戸は買わないですよ。</p>
村井委員	花を買わないですかね。
中野（節） 委員	私、小須戸でも講座をもっているのですが、小須戸の人はいないから、皆、他所からやって来る。
村井委員	なぜかというのは私も分からないのですが、小須戸の人というか、新潟の人は柿を買わないではないですか。柿はもらうものだと思っているという、小須戸の人は。皆、食べる柿を。
中野（節） 委員	庭にあるから。
村井委員	食べる柿です。柿の時期になると皆もらえるから、買う習慣がないというのがこの地域はあるのですよね。だから、花もやはりたくさんあるから、花などは買わなくてもあるからという、そういう。
中野（節） 委員	私、小須戸に花はないと思います。ないです。それはローカルな話なので。
阿部委員	アザレアは、小学校で卒業式をやる時、大抵飾ります。植木鉢の。卒業式のステージの上に壇があって、その前にお花を飾るのですが、毎年ほぼアザレアです。
村井委員	小須戸小学校もアザレアでしたね。
中野（節） 委員	それは、産地だからかもしれないですね。
阿部委員	それは、私も産地だからではないかなと思うのです。
村井委員	この前、小須戸小学校もアザレアでしたね。その前、カスミソウをしていたのです。カスミソウではない。
中野（節） 委員	サイネリアか何かですか。安いから。

阿部委員	だからアザレアを、私は、アザレア、小須戸の花と知っているけれども、そう言えば、そういうことを別に表示することもなく、当たり前のように卒業式に飾っていて、卒業式が終われば各クラスでお世話をしてとやっていたから、そういうところもPRが必要なのだと、今、反省しました。
中野（節）委員	本当は、アザレアに関して、宣伝広告とかPRも県が出しているんで、新潟県頑張れみたいな。そのおこぼれをうちがもらっているのですけれども。
阿部委員	目を向ければ活かせるものはいろいろあるのだなと、今、お話をお聞きして思いました。
中野（節）委員	当たり前であって、私たちの意識がなくてさっと流しているけれども、もしかすると外から見た人はすごいねと、こんなに綺麗な花があるのだねと言われるかもしれないし、多分、思ってくれると思う。そこをどうやって見せていくか。市場ツアー、いいですね。朝早く集まって、競りから見学、集合時間4時とか。
北澤委員	市場を会場とした花、なかったでしたか。
中野（節）委員	前はありましたよね。市場で。イベントか何か。
玉木委員	江南区。
中野（節）委員	産業振興課がやりますよね。
玉木委員	そこと一緒に市場祭りみたいなことで秋にやっていたのですけれども。
中野（節）委員	江南区は一生懸命ですよね。江南区の産業振興課。
阿部委員	この前、インスタ、私、つくっているのですけれども、そこで何か市場でみたいなものがあつたような気がしたのですが、それなのですね。
中野会長	<p>そろそろ時間が少し押してきましたけれども、ほかにいかがでしょうか。よろしいでしょうか。なかなかいろいろな楽しいこれからの展望が見えるような案を出していただきましたけれども。</p> <p>それでは、続きまして次第3の「その他」なのですけれども、委員の皆様から何かこの機会にご報告等がありましたら、よろしく願いいたします。</p> <p>よろしいでしょうか。ほかにないようでしたら、事務局にお返しいたします。皆さん、ご協力ありがとうございました。</p>
司 会	<p>中野会長、委員の皆様、本当にありがとうございました。</p> <p>今回をもちまして、花育推進委員会は終了となります。花育推進計画は廃止という形になりますけれども、市の農業構想に位置づけるなど、より</p>

広い視点で今後、花育を推進していきますので、委員の皆様のご意見にもありましたけれども、やはり行政だけでは限界がありますので、いろいろな方がかかわっていくということが必要だと思っておりますので、どうぞ今後もよろしくお願いいたします。

最後に連絡です。今回の花育推進委員会の謝礼は、後日ご指定の口座に振り込ませていただきます。会場にお越しの委員で駐車券を提出された方は、無料処理をした駐車券を忘れずにお持ちください。

以上をもちまして、令和4年度花育推進委員会を終了いたします。お忙しいところ、長時間に渡りありがとうございました。